

アラン

ーノルマンディー
人のプロポIII
【2014年2月号】

翻訳：高村昌憲



前書き

「一ノルマンディー人のプロポ」が、ルアン新聞の見出しとして一九〇六年二月十六日から一九一四年九月一日まで、毎日掲載されたことはよく知られている。シリーズ全体では三〇九八篇（1）になるが、それらは忘れられているようにも見える。しかし、熱心な読者たちはこれらの毎日のテキストの中から、最も感動したものを保管していた。かくして一九〇八年から一九一四年までの『アランのプロポ一〇一章』全四巻が刊行された。第一巻は、無報酬で協力することがルアン新聞からアランへ提案された。残りの三巻は予約購読の申込みで出版された。この出版は大変に限定された印刷であったために直ぐに絶版となり、多くの人々は一九一四年～一九一八年の大戦後まで『一ノルマンディー人のプロポ』を知らなかった。

ミシェル・アルノー（本名はモーセル・ドルアン）がアランのプロポを収集・構成して、「フランス新評論」版として発行したのは一九二〇年である。全二巻の各々は一七五章のプロポからなり、同じ様な配列であった。

一九五二年にはこれら二巻のうち第Ⅰ巻は、殆ど修正されずにミシェル・アレクサンドルの尽力で再版された。同時に、彼がこの再版後に決心したことは、このシリーズを年代順に最も意味深いと同時に美しいと思われる一九一四年以前のプロポ集として再度出版することだった。この様にして一九五五年に『一ノルマンディー人のプロポⅡ』（一九〇六～一九〇八）が出版された。第Ⅲ巻のこの本はシリーズの続きであり、一九〇九年、一九一〇年、一九一一年にルアン新聞に書いたプロポ集である。

この本を構成するのは、『アランのプロポ一〇一章』の第Ⅲ巻と第Ⅳ巻に既に入っているプロポだが、それらの殆どのものがミシェル・アルノーの『アランのプロポ集』第Ⅱ巻の中に入っている。それに反して、一九二三年以後に刊行された選集に入れられたプロポは、計画的に除かれた。この第Ⅲ巻に入っている一五〇章のプロポについて言うなら、そのうち四五章はルアン新聞に掲載されただけで、他には発表させずに来たものである。

A. D.

（1）三〇九八章は誤りで、その後、アラン研究所から刊行された『一ノルマンディー人のプロポ』（全九巻・一九九〇～二〇〇一）は、全三〇七八章の全集になっている。

序文

アランはアランに言います、「もう少し私を高く飛ぶようにさせて下さい。この耕作人は既に蟻のようにぎりぎりまで太った。しかし、お前は大地を削り、山の方へ土竜の巣穴を掘ることしか適していない。舵を取って方向を決めなさい。驚になって風景を見ている私たちは、王様になって考えるだろう。新しいもの、大胆なもの、楽しいもの、慰めになるものを、この大地の上で私に見せて下さい。バスや空飛ぶ機械のように、奇跡が皆を豊かにすると私に信じさせて下さい。多分、金持ちになるために働く貧乏人を助けることは出来ないし、ご馳走が多くあればある程、恐らくパン屑も多いだろう。習慣のことも考えて下さい。不公平も習慣であることを考えて下さい。〈教会〉が発明者たちを焼き殺したことを考えて下さい。お前は修道士や宗教裁判所判事に成りに行くのだろうか。我々の翼を潰しに行くのだろうか。そうではない。時間が経てば飛びなさい。誰でも直ぐに飛行機に乗るでしょう。それまでの間、私の話を滑空させて置いて下さい」。

アランはアランに答えます、「もしもお前が望むなら、飛行機の舵を取りなさい。もしもお前が望むなら、金持ちに成るために考えなさい。代議士に成れば良い。アカデミー会員に成れば良い。個人であるのを忘れろ。国民の喜びと財産を計算せよ。直ぐに職業が皆を孤独にさせることも忘れるな。機械の主人たちはお前を愛するだろう。誰もがお前を愛するだろう。何故なら彼らは全てを望まないし、心の底では和解したり、眠ることしか望んでいないからだ。それ故に高く飛ぶことを考えよ。お前の邪魔をするのは誰か。私は空気のように軽く、お前は操縦桿の上に少なくとも私の手を感じていない。私は良い結果を得るだろう。私はお前が空を飛ぶための車輪やハンドルを発明するだろうが、出来が悪い限りお前もそれをしなければならぬだろう。少なくとも私は女中たちを望んでいない。お前はそこで何も出来ないし、私も出来ないのだ」。

(一九一〇年十一月二五日) (1)

(1) この序文は、『プロポー一章』シリーズの第三巻のためにアランによって書かれたこととなっているが、実際は一九〇八年十一月十一日付けのルアン新聞に初めて掲載されたプロポである。

一 日時計 (LE CADRAN SOLAIRE)

先日の昼頃、私は日時計の近くで足を止めました。それは壁の上の針ではありません。芝生の中央に建てられた子午環で、赤道によって区切られていて、その上に時間が表されています。結局のところ、それは溝をつけた球面で、太陽との関係で正しい時刻を大地に示しています。私が両足で立っている大地と同じです。私がこの装置を大変簡単だと考える度に、本を読んでも無駄になる古くからの真理は、直接見ることで教えられます。

その日は霧が出て、全てのものがはっきり分かりませんでした。大地は、大河がベッドになったかの如くに水分をしみ込んでいました。昼間でも黄昏時のようでした。そして、赤い紙を貼ったカンテラのような太陽は、昼の十二時でも殆ど夕暮れのようなようでした。十二月末頃の太陽は昼の十二時でも低い、とあなたは気付いたでしょうか。多分、気付いていません。世間の人には知っていることですが、誰もそのことを考えません。生半可な知識を持っている人間にとっては、太陽は黄色い円盤であり、地球は楕円を描いてその周りを回り続けるもっと小さな円盤です。しかし、私は地理の地図帳の最初の頁から、全てを考えませんでした。私には未だ上辺のことでした。

私は日時計を良く調べました。太陽が赤道より下にあったのを私は良く見ました。まさに鉄のピークの方角に書かれていましたが、南回帰です。私はその土地に住んでいる人々のことを考えました。彼らは近頃、頭上に太陽が垂直にあり、家にいても暑かっただろうと私は思いました。私は、太陽が今私たちに戻って来ており、毎日少しずつ高くなっていくことも思いました。太陽の文字盤は空の中で、別の点を示しています。私は夏の木陰や干し草の匂いのことを考えました。石で封印されたその鉄製の円盤は、四季の変わらない繰り返しを表します。

突然に、私はそれが一月一日で、正式なパーティーであることを理解しました。今なのです、今は国家元首が新年を知らせなければならないまさにその時なのです。沈む太陽を見る度に人々は、永遠の夜と寒さと共に、恐らくこの世の終わりがやって来ると信じた時がありました。しかし、指導者たちは、そこにあるような円盤に立って、多分、太陽が再び昇って来る日々を前もって見ていたのです。それは彼らが国民を一つに纏めて、新しい季節の訪れ、つまり新年や収穫期を告げる時なのです。現代では最早何も告げませんが、微笑はその儘あります。祝詞や祈願もあり、それらは失われたあらゆる希望を表しています。〈財務省〉〈登記所〉〈税務署〉〈税関〉の人々が、力を持った父であり、国民の王であり、歴史を創る人の手でした。歳取った〈太陽〉に敬意を払いに行くために、所轄の帽子で身を飾るのを考えることが私には嬉しいのです。

(一九〇九年一月一日)

二 世論は行為から生じる (OPINIONS VIENNENT D'ACTION)

警察に対してわめいて戦う学生たちは(1)、医者たちの間の平等を主張するためです。彼らは十分に扶養されている若者たちで、新しいゲームを見つけたのです。彼らは拳骨を受けたりやったりする前には、今あるような権利を確信していませんでした。「私は行動する、何故なら安全を確信しているから」。以上からは、人間が如何に歴史を書くかが分かります。しかし、それは証拠があるから行動するのではなく、寧ろ証明するのは行動です。

その人はサッカーの試合を見ている観客です。彼は、好きになることは出来ませんが、やりたいではありません。何故ならポケットに手を入れているからです。しかし、メンバーを探りながら混戦から抜け出る選手に尋ねて下さい。勝ちたいのか聞いて下さい。それを聞いて答える時間があつたなら、次のように答えるでしょう、「勿論だ、私は勝ちたい。傷付いた鼻を見れば分かるでしょう」。

それ故に、私たちは一般に行動の理由や証拠の重さを量るのが苦手です。私たちは量るのが苦手です。何故なら吟味するからです。人間は戦います。何故なら互いに戦うからです。それというのも、拳骨を貰ったりやったりしても、世論が変わらないことを主張しに行かないからです。そうです、私は拳骨が何時も言葉や文章を変えないことを認めますが、口調は変わります。心臓の鼓動は早くなり、鍛冶屋のふいごのように肩が上がったり下がったりして、筋肉は鞭を打たれた犬の群のように次から次に盛り上がっています。信じる人間はそこにいます。彼は自分を殺しに行きます。何故なら傷付けられたからです。

この論理は賢人をびっくりさせます。賢人を少しは磔にすることです。その時は賢者が現れるでしょうが、彼は群衆の中にいる神のように、喉を潤らし、熱を出して服を着ています。毒人參から採った毒薬を飲む時のソクラテスは、まさに正しいことを示すところでした。しかし、彼は微笑していましたので、それを失い、信頼もなく死にました。何故なら彼は怒りもなく死んだからです。

物静かで慎み深い男でも、もしも何千人もの男たちと一緒に走って叫び始めたなら、このゲームに興奮します。苦痛や空腹さえも刺激になります。彼は、フランス軍がプロイセン軍を破ったパルミーで、自分のパンを捨てます。それは英雄の行為です。もしも逃げ出したりしたなら、恐ろしさで一杯になります。彼は自分の恐怖を恐れます。彼は駄目だと思います。何故なら走り去るからです。彼は逃げないで多くの死に勇敢に立ち向かいます。ギャロップで走る野生の馬を想像して下さい。蹄が大地の上で激しい音を立てます。小枝が鞭のように刺激します。植物の棘が傷付けます。馬は走ります。何故なら走っているからです。もしも馬の小さな頭脳が思想を生んだとしたなら、どんなにか信頼されることでしょう。

トロイアの伝説についても、ギリシア人たちはもっと美しい別の伝説と結合させましたが、それは他者や私たちの人生全てを教えるものです。ヘレナはトロイアにいなかったが、エジプトにいたと彼らは言います。ギリシア人やトロイア人たちは、亡霊のために戦いました。その様にして私たちは成長します。私たちは善があるとされている城砦を包囲します。他の男たちが私た

ちの道を遮断した時には、勿論その善があるのは確かなことなのです。そして、大変に貴重な善は私たちが歩いている所にあるのを彼ら自身が最早疑わなくなるのは、私たちがそこへ行くために彼らを殺そうとするのを見るからです。死者たちが直ぐに積み重なります。私は戦うことを断念するのでしょうか。亡霊が私や他者たちにとって大変に価値があると、私は何時か認めるのでしょうか。いいえ、いいえ認めません。私は、ヘレナがトロイアにいたのは確かであると思います。都市の周りの沢山の死者が、このことを良く証明しています。

(一九〇九年一月八日)

(1) 一九〇八年十二月二四日にあったパリの医学生デモは、乱闘騒ぎに変わった。医学の一級教員資格に関する新条項に抗議した学生たちは、更に有利な決定を得ることとなり、当該試験は延期された。

三 防犯警官 (POLICE PRÉVENTIVE)

私は素晴らしい警官と知り合いになりましたが、誰も投獄しないという規範が彼にはありませんでした。良き警察とは犯罪を防止することであり、暴いたり犯人を罰することではない、と彼は言いました。警官の仕事が完全に定義されていたことを知らなければなりません。十五年以上前に、彼は大統領を警護した班のリーダーでした。そのことを私が知ったのはその時、その規範を教えながら群衆の中で時々私が警官たちと知り合うのが楽しかったからです。群衆の行列が通り過ぎると、群衆を見詰めている警官たちしかいません。私も又、群衆を見詰めていましたので、警官の大きな眼が私の方を見ていたのです。そのことは私を笑わせましたし、彼が就いた仕事について私たちが話す機会になったのです。

彼は言いました、「私の周りには仕事の難しさを知っている元気な連中がいます。私たちは決して家具付きのホテルへは行きません。そういう人々の後は決して追いません。決して質問しません。私たちは眼に見えない網のようになって、行列の周りにおります。もしも或る人物が不審に思えたなら、私たちは間違いなく彼を、群衆の活動や雑踏や議論や転倒から引き離す戦術を取ります。彼は何か悪い企みを持っていると私たちは思います。彼は、羊のようにお互いに身を寄せ合っている愚かなブルジョアたちを呪いながら立ち去ります。彼は先ず、偶然に不審と見られたことを非難します。幾つかの未遂の後に、逆の運命を思って信じることになるでしょう。というのも行動する人間は運命論者であるからです。要するに私は、力には力で対抗させました。この方法が現在は正しいのですが、私はそれが齎す成果によっても最良であるか否かを自問します。何故なら、それらの状況が反対になった時、計画を続行出来る人は少ないからです」。

私はこのことをもっと良く考えて見ると、その見方がより強く私に印象を与えているようです。説教は障害にも値しません。説教は苛々させます。取分け、もしもそこに個別の意志を理解しなかったなら、その障害は決して苛々させず、思考の流れを変えるでしょう。以下は、既に半分は労働者になっている泥棒です。彼は盗み、叩かれ、捕らえられます。彼には戦いの思想が生まれます。彼は再び盗みます。私たちは平安を手に入れるために彼を殺しに来るでしょうし、人生を彼の犠牲にさせることもありません。

それと同じ人間が、今いる場所を観察している間に、二人の警官が静かに円を描いて通りを回りながら、絶えず何かを見付けていると仮定してみましょう。確かに、彼は更に見に行きます。もしも彼が再び二人の警官を見つけたなら、次のように自問しに戻って来るでしょう。「この仕事は良くない。さもなければ私もうまくこの仕事を熟せない」。彼は仕事に戻るでしょう。何故なら食べなければいけないからです。そして彼は正直な人間に戻るでしょう。何故ならそれらは私たちを作り上げる行為であるからです。そして箴言集は、私たちの習慣を結果にしたものです。

以上が高圧的な警官よりも、あらゆる点で犯罪を防止する警官の方が価値の高い理由です。但し、それ以外にもっと大切なものが多くあるとも私は思えません。警ら隊の警官たちが、どの位生命に関わる仕事をして報いているのでしょうか。ところで、私たちは酷い暗黒劇にしか熱中

しません。私が言って来たように、私たちは不足していることが良識でもあるのです。

(一九〇九年一月十六日)

四 スピノザ、愛と喜びについて (SPINOZA, SUR AMOUR ET JOIE)

スピノザを読むための本当の時間が始まります。というのも灰色の空は大地に重くのしかかり、春が来るのを期待するにはまだ少しばかり遠いからです。もしも暇な時間があつたなら、最も賢明な人はそれでも最良の時が来るまで今の時間に寛大になることでしょう。

私は、情熱という嵐を考えさせる如何なる話が新聞にあるか知らないので、大変に単純そうな一つの定義を読み直しました。それは良いことを言っています、「愛とは、喜びに外部原因の観念を伴わせるものである」。哲学者スピノザはこの様に話しています。そして、もしもさつこの言葉を読んだなら、何も気付かせてくれません。しかし、彼が私たちに言いたいことは良く理解しようとして下さい。私たちが感じる愛は、私たちから生じます。それは愛になる前の喜びです。更に一步進めましょう。それは喜びになる前の満足感です。愛は、健康状態に与えられた名前でしかありません。そして私たちは恐らく、その点についての話を沢山創ります。愛されている対象が更にもっと愛されるに相応しく思えるようになる理由を、私たちは見出します。自分だけの喜びでそれを飾り立て、それがやって来て愛されているのだと信じます。愛されている対象はそれ故に、動機であるよりも寧ろ口実です。決して愛するから幸せなのではありません。幸せだから愛するのです。この様にして愛の錯覚が理解されます。そして、観客にとっては錯覚しかありません。愛する者にとって、幸福とは全く現実のものです。

要するに、私たちは他人の幸福を良く理解することは決してありません、何故なら自分が与える口実でそれを説明したいからです。そこにいる彼らは大変に退屈しているに違いないからブリッジのトランプ遊びをしているのである、とあなたは言います。何故ならあなたは、このトランプの勝負をして面白くなれるものを求めているからです。それ故に、楽しみは決してトランプが齎すのではなくて、多くは彼ら自身によるのです。遊びは断じて、健康を楽しむ一つの方法でしかありません。ジャン＝ジャック・ルソーはサン＝ピエール島にいた時、自分の幸福をそんなに複雑にしませんでした。彼は自分の船の中で眠り、漂流した儘でした。全く純粋な喜びを味わっていました。しかし、そこでは困難な方法です。もっと簡潔に言いましょう。そのことが証明していることは、彼の人生がこの瞬間において、彼の健康にとっては大変に具合の良い長い休息だったということです。彼がもっと若かったなら、長い行進を愛しましたし、深淵に小石を投げるのを愛しました。結局、私たちの喜びは沢山の小さな原因が齎しますが、名付けるためにそれらを一つにしたいのです。

そのことによって、何時も陰気な服を着ていて、愛も曇りがちになる疲れは免れません。そして、その様な場合にも沢山の理由があるのでしょう。他人の失敗からも自分が不幸であることを証明するのでしょう。大きな不公平です、何故なら他の者は何も出来ないからです。それ故に大袈裟に言わないように用心しなければなりませんし、喜びが戻って来るのを待たなければなりません。何故なら、何事もリズムとなって繰り返すからです。そして、多くのことが重なり合った悪口を大袈裟に言うことよりも、寧ろ悪を理解する知性を訓練することです。雨の日には、私の取るに足りない丸薬を試しに飲んでみて下さい。

(一九〇九年一月十八日)

五 仮説と仮説 (HYPOTHÈSES ET HYPOTHÈSES)

「科学的真実として、私たちは実際に仮説をあなたに提示するだけで良い」。それは最近アカデミー・フランセーズで歌われている歌です。そして、有名な学者が〈優れた思想家〉であることを示すのは、間接的な方法によるのですが、あくまで彼が社会での不正を覆ってきちんとした服を着ることを主な目的と見做さなければならない限りにおいてです。

仮説について言うべきことは沢山あります。先ず言わなければならないことは、或る種の仮説はあらゆることに何の役にも立たず、解明することが重要であっても、全てが如何に曖昧であるかを私は理解しています。顔に潰瘍がある男と出会い、私はルルドの水で治ると仮定します。私はこのことを証明するために現場を押さえ、信者の説明を私は待ちます。その男の潰瘍を治したのは神であると彼は言います。暫くの間この水を与えたのは神で、普通の水のように見えますが、潰瘍を治す効力があるのです。そして、もしも私たちが神の仮説を完全と認めたなら、このことは理解出来ないことは何もありません。もしも神が限りない力を持っていなかったなら、完全ではないのです。

この説明に満足する者たちは、実際におかしくありません。私は人が仮説を提示するのを許しますが、そのことについては多くの疑問があります。そのことが肝心です。その水で神が如何にして潰瘍を治すのか、を私は十分に理解したいのです。この疑問は大変自然なので、信者たちは殆ど何時もそれに答えようとします。或る人は「信仰であるということを知らないのですか。神への熱心な思いが、如何に体や血液の循環や栄養に効果を上げるのか知らないのですか」と言います。他の人はもう少し考えを進めて、つけ加えて言います「体の組織は思っている以上に早く作られます。あなたの体が少しばかり切れたなら、治るのに二十四時間もかかりません。治す物質を持って来て、廃物を持って行くのは血液です。血液の循環が神経と神経を結んで、従って脳によって体の各々の部分を調整しています。それ故に脳の活動がなければ決して体の栄養に変化が起こらない、という考えはあり得ないことではありません。色々な事例があります。一つの考えで私たちの顔が赤くなることもあります。つまり局所的な充血の始まりが起こっているのです……」。

私は黙って聞いていました。彼は私に興味を示します。何故なら私よりも信心深くないからです。少しでももっと先のことを考えたなら、最早神に仮説は必要ないでしょうし、奇跡は平凡な事象に戻るでしょう。そこには言わなければならないことがあります。色々な仮説があります。そして神学上の仮説に私たちを導く精神という自然な活動があり、それは肯定的な仮説に替わるために何も説明しません。〈科学〉も、人が望むのと同じ位に慎重で、洗練されて、〈アカデミー・フランセーズ〉になり得るのです。それは相変わらず神々を追い払います。

(一九〇九年一月三十日)

六 媚びた手紙 (LES VALETS DE LETTRES)

ル・R. P. フィレアスは、若い子爵クリスティアン・ド・オート＝バルバラに言いました、「我が親愛なる息子はアカデミー・フランセーズの会議に行かなければならない。駄目だと言うな。あなたは行く。礼儀正しく、冷淡で、偽善的な話は退屈だとあなたは言い張るものと私は思っている。あなたは薄紫色の小雑誌や〈小きれいな家〉での講演の方が好きだ。勿論、喜ぶことが重要であったとするなら、陳腐で大袈裟な講演や急行列車のように遠くから聞こえて来る声を聞きに、私は行くと思うだろうか。

そうではない。喜ぶことが重要ではなく、社会の義務を果たすことが重要である。あなたはミサへ良く行かないだろうか。一種の神聖同盟のような自然の成り行きによって、あなたは〈信仰〉と〈高貴さ〉と〈豊かさ〉が作るものしか良く理解しなかったのでしょうか。私はそれ故に、最後の秘密を暴かなければならないのでしょうか。少なくとも、あなたはそれを理解するに相応しい。

何もせずに休ませて出世を諦めた小市民が、軍団のように些細な贅沢を手放さないで、ついには惨めな職人集団となって気休めを言わせて置くのは、如何なるアルキメデスであっても解決を見ないような社会機構の問題である。幸いなことに、その問題は私たちが生まれる前に良く解決を見た。私たちはそれを持ち続けるべきであって、拵えるべきではない。それ故に、何処から危険がやって来るのかを見るのが重要である。作家だけしかやって来ない。科学と考察が支配者を明るく照らすに留める限りにおいて、それらは社会秩序に有益である。ジャン＝ジャック・ルソーというならず者のように、労働者の息子は祭壇の火を逃れて、神々の秘密を大衆に委ねるようになれるのだ。それ故に、私たちは科学や文学の召使いにならなければならなかったし、彼らは若者たちの野心を変えたための魅力が多くあったのだろう。私たちもそれらを持っている。思考することや書くことを知っている者は皆、教育功労勲章を示す緑色をした棕櫚の豪華な制服を夢見ている。同様に、あなたは青春初期の心の乱れからやっと抜け出て、愚か者たちが趣味が良いと言う数学物理学、政治、美学を、アカデミー会員の慎重さにぴったりと合わせることを理解する。愚か者にはならないようにしよう、そのことに私は同意する。しかし、愚か者には喜劇を与えよう。中身の無い誇張した演技、沢山のふくれっ面、言葉の遊び、感傷的で甘ったるい作品、化粧をした歴史に拍手をしに行こう。これらの儀式は儀式そのものだ。半人前の学者たちは、彼らが役に立つと思っている。しかし、もっと他のことを理解してやってみることだ。役に立つ根本の処まで行く時に、超人が嘗てなし得た最も気高いものが心の奥に獲得されるのだ。〈真実〉は鎖に繋がれているが、回転砥石は回る。行け、我が親愛なる子爵よ、あなたの才能はミサに見劣りしないのだ」。

(一九〇九年二月七日)

七 比例代表制 (REPRÉSENTATION PROPORTIONNELLE)

〈比例代表制〉の問題について考えるのは、大変に難しいことです。この制度の詳細は注意を要します。出来る限り単純化してみましょう。

ここに、想像するのが容易な一つの制度があります。社会主義、急進主義、楽観主義、伝統主義のように、フランスには三つか四つの党派があったと私は仮定します。フランスの有権者全員が、これらの党派のレットルから一つを選択するように促されます。票を数えます。社会主義は百票のうち二五票を獲得します。急進主義は四〇票、楽観主義は二五票、伝統主義は一〇票です。これらは私が想像する数字です。下院議員は全部で四〇〇人を選挙で選ぶものと想像してみます。社会主義は二五人の四倍の議員に相当しますし、急進主義は四〇人の四倍に相当し、以下はこれに準じます。

さて今度は、議員を選出することが重要です。各党派は会議に集まり、彼らの代表者を指名します。有権者は、もう複数の主義から選ぶのではなく、今度は複数の人間から選ぶのです。有能な党首は議論もなく選挙されますし、最も誠意があつてしっかりしていると見做された人間が投票で選ばれるでしょう。その後、議員たちは自分の理念を守ります。彼らは一人の人間として採決します。〈統一社会主義党〉を考えて下さい、私たちの仮定が実現されれば、あなたは〈政治〉が何であるかの観念を生むことが出来ます。

この制度は全く教義的な〈政治〉を認めるものであり、形而上学と呼べるものです。そして、私としてはそれを決して軽視しません。自然の事象を研究する時、偏見を自分に与えること、気体や液体や固体の世界を想像することは私には滑稽に思えるのと同様に、人間のことが重要となるや否や人間が作るものを公正と見做すのと同様であり、安全とか幸福とか正義という理想がもしも出来ることならそれに従って社会に組織され得ると思うのと同様です。

少なくとも、政治や法律の基本は今固定化されていると言えます。私たちは最早、王や貴族や聖職者や特権について議論しないまでになっているし、大臣への質疑権についても議論しません。市民は全て法の下では平等であり、子供は全て保護されて教育を受ける平等の権利があること、そして暴力というものは厳密には必要でない時は、暴君であると理解されています。それ故に少なくともそれらの原則や憲法に基づいて決定し、政府の活動を点検すること、つまり会計報告を再検討したり官僚を監視することが重要であるように私には思えます。そして、権力の濫用というものには、ポールとかジャックという市民が決然とすることを期待しますので、個人の権利要求が窒息したり、大臣がそれらの原則に敬意を示しながらも大変容易に逃れることには心配しなければなりません。それというのも党派は公共の利益を口実にする国家的理由を持つようになるからです。

(一九〇九年二月八日)

八 死の苦しみ (PEINE DE MORT)

私は一度、ゴヤのデッサンに心惹かれたことがありましたが、大変はっきりと記憶の中に刻み込まれています。紙製の大きな縁なし帽子を被った手足を縛られた女が驢馬の上にいるのが見えます。その周りには修道士たち、十字架を運ぶ人々、そして群衆がおります。そのデッサンの下の方に、作者は「最早、希望は無い」と書きました。この女の顔は恐らく、ゴヤが同じ様な事件で観察したもので、それらの言葉からは私たちでは説明出来ない感情を表しています。茫然自失、粉碎と言ってみても、それでは言い足りません。その人は生きている死者です。従って彼らは、監獄の門の処で、その女の首を切る人々のように見えます。

彼らの身になってみたいと思うと、時々うんざりさせられます。しかし、それは文学でしかありません。私たちが両肩を押されるのを感じることはなく、ついにはもう人間として扱われることはなく、物として扱われます。そうなればこれは最早人間は誰もいないドラマです。

人間は、人間の中にいるから人間を感じるのであり、その限りにおいて彼の状態についての意見や考えを持つことが出来ます。クランクビルのことを考えなさい。彼は結局、自分の心配をしてくれるのが分かれば、大変満足なのです。人は彼に尋ねますし、何を言うか聞きます。人はわざわざ彼に答えさせます。検事は彼に反対論を述べます。裁判官の前にいる時、殺人についての事情はこの通りなのです。彼は人間であり市民です。彼には法律があり、弁護人がおります。その後で、彼は刑を受けます。人間として扱われます。彼は約束させられますし、脅されもします。視線を監視され、夢も監視されます。徒刑囚はまだ自分の眼は自分のものと定義出来ます、何故なら監視人たちが彼を叩いているとしても、腹を割った関係はあるからです。それらの打撃は彼を脅えさせるためであり、仕込むためでもあるからです。それには意味があります。

最後まで目覚めている数分間の時でさえ、受刑者が事物に人間の視線を投げかける間には潮時があります。或る時は行儀良くするように彼に説き、他の時には彼に飲み物を与えます。死刑執行人とその補助者は、沢山世話を焼きます。もしも偶然に生き残ったなら、それらの詳細は今でも感じる事が出来るものであり、語る事が出来るものです。その上、それらは全てが行動している時よりも話を聞いている時の方が多分、怖いと思うでしょう。何故なら詳細の一つ一つが新しい出来事であり、心を占領しているからです。そして、人間は何時も彼について少しは尊敬を感じるものであり、そして彼自身は小さな自由というものを感じているからです。

しかし、その場に〈権力〉が一瞬入って来ると、孤独が支配します。私が想像するのは、石を押すように死の一瞬を意味するに違いない、そしていわば死を与える新しいやり方で人間を突然に押す手です。敬意は立ち去りました。最早そこに人間はおりません。それは眠り、耳には何も聞こえません。彼が活着していることは全て忘れます。彼はそのことを考えられるのでしょうか。恐らく、考えられません。余りに新しいのです。それは何にも似ていません。〈権力〉は恐らく、肉体を殺す前に〈思考〉を殺します。

(一九〇九年二月十四日)

九 雌鶏たち (LES POULES)

一羽の雌鶏が傷付いて血を流していると、他の雌鶏たちは貪り喰います。雌鶏たちは意地悪いものであり、そこで決着をつけなければならないのです。雌鶏たちは馬鹿なのです。何でも構わずに表面を削った後で啄みます。それらは儀式です。雌鶏であれば行う行為です。雌鶏の祈りである削って啄んでいる間に、他の雌鶏の上にも嘴で襲いかかるようになります。そして、もしも肉の断片を食べれば、全ての雌鶏はそれを啄みます。その雌鶏も全ての雌鶏も同じ様なもので、自分自身で耐えて苦しそうに息をすることを理解させなければならないのですが、この認識は雌鶏たちには届きません。

この認識は人間たちが理解することです。人間たちは両手を伸ばすだけです。雌鶏をその儘にするだけで、嘴で突かれた処を決して見ないだけであると言うのでしょうか。人間の社会も、啄むのに良く出来た機械のようなものと理解するのと同じで、食べているのを良く見ることが出来なくなります。私はきれいなワイシャツや刺繍された美しいシーツを見せられ、私はそれに一日働いたお金を支払います。それらを縫いつけた人の昼間や夜の日々は、決して私に見せてくれません。それ故に、ショーウィンドーを啄むように元気な雌鶏たちは、柔らかな心臓や近視の眼を啄むのです。

私は鶏小屋の中で治安を維持しながら、これらの続きを考えました。私は金色の美しい雌鶏の世話をして傷の手当てをしましたが、他の雌鶏たちが半分程食べていました。私は自分の行為に夢中でした。小さな脳をした雌鶏たちの中にいて、このイマージュの遊びや欲望を続けたいと思いましたが、喧嘩早い雄鶏の鶏冠には波紋のように血が付いていました。鶏たちを尻込みさせるには、棒で十分であることが或る日分かりました。餌の時間になると、私はその棒を鳥籠にぴんと通した儘にして置きました。その棒は、秩序を保つのに十分でした。雌鶏たちは文明化されました。

そして直ぐに、その家の管理者は雄鶏を殺して食べることにしました。この知らせに私は困惑しませんでした。それらの言葉は普通のことです。しかし翌日、私はその雄鶏の死骸を見ましたが、まだ羽がむしられていませんでした。私は思いがけない感じを受けて、辛い気持ちと戦わないこともなかったのです。というのも、首を伸ばして高い声を出している人間のように、怒っているような雄鶏を見たからです。私はそれを食べましたが、嬉しくはありませんでした。それ以来、私は雌鶏と関わらないようにしていますし、焼かれた肉が出された時は本物の雌鶏のように啄んで食べ、沢山の他の良いことと同じに振舞い、そのことは余り考えないようにして見ないようにしています。その点で私が雌鶏よりも高尚になれば、やはり正義について考えることが出来ますし、モラリストたちはそういう準備をしていましたが、雌鶏の見張りは決してしなかったということが良く分かります。

(一九〇九年二月十五日)

十 道徳教育 (ENSEIGNEMENT DE LA MORALE)

共和国の運命を真面目に考える人々のうち急進派の多くの人々は、神の栄光が失われた今、如何なる倫理教育を若い市民に与えれば良いかを尋ねます。その点について私には意見があります。それは倫理の学習が、神学の学習よりも実益がないということです。

私は先日、高位聖職者に言いました、「あなたの教育には二つの目的があります。専門性を禁じて知性を抹殺し、戒律を増加して倫理の意識を抹殺します」。そこには二つのパラドックスがあります。一番目のパラドックスは、十分に事実を説明しています。大変に学識が深い専門家には事欠きません。技術者、弁護士、天文学者、化学者です。彼らは自分の専門外のことを考えると、非常識な戯言を言います。二番目のパラドックスは、恐らくそれを理解するのがもっと困難なことです。

プラトンの対話篇がありますが、大変に短く、それを読むのは容易で、その表題は『エウチプロン』と言っています。〈善〉とは、神の気に入っているものであるのだろうかとかとソクラテスは尋ねます。そのことは無限に影響力があります。もしも〈善〉が神の気に入ったものであるなら、神に意見を求めて、必要な場合には司祭や予言者の力を借りて、神が与える規則に従わなければなりません。でも神は一般には余りに善良な悪魔です。私は大金持ちで熱心なカトリック信者と知り合いになりましたが、彼は言いました、「神は、貧しい人々の財産の一部を私に管理するようにしたのだ。そして私は施しをするよりも寧ろ給料を支払わねばならない。それというのも、お前は額に汗してパンを稼げ、と神は書いているからである。私は仕事を組織するのが仕事であると見做している」。それ故にこの人物は、石工たちが楽園を手に入れるために、美しい家を建てさせて来たのです。

自然に、もう少し人間的で理性的な規範が表現出来る筈です。しかし、良きにしろ悪きにしろ、それらの規範は全く同じ結果になります。良心を眠らせます。イエスの処刑を許した古代ローマの総督ピラトは両手を洗います。何故なら規範に従ったからです。倫理的な意志では半睡状態になりますが、それは偽善以外の何ものでもなく、偽善者であるかないかです。「私は皆が作るものを作る。正直な人々は皆私に賛成するだろう」。そこには治安の原則があるのであり、倫理の原則ではありません。それというのも、本当の問題は後者の倫理にあるのであって、神が私を許すのか、それとも人々が私を許すのか否かを知ることではないからですが、私が自分自身に賛成すれば良いのです。ジャン＝ジャック・ルソーは〈モラルの天才〉でしたが、大変なる真実を言いました。それは、私たちの良心は決して躊躇しないということです。ピラトは両手を洗いました。そのことは彼が全く自分に満足していなかったということを良く示しています。彼はピラトについてのピラトの裁判に反対して、正しい法を望みました。私たちは倫理の規範の力を頼む時、殆ど何時も自分を許しています。

私はそれ故に美德しかこの世に見ません。美德そのものの声を聞くこと、美德と一体に生き、美德と共に平和に生きることです。もっと簡潔に言うなら、他人の意見を求める代わりに、美德と共に生きることです。「それ自身と共に誠実であれ」という教訓は美しく、トルストイは何度

もそこに身を隠しましたが、私は雑駁な福音主義に従う理由が分かりません。しかし、それを如何に教えるのでしょうか。〈学問〉という沈思黙考を通してです。何故なら、理解したいと思い、少なくとも愚かになるために暗誦したいと思うのでないなら、直視しなければならないからです。私はスタンダードに力強い言葉を読みました。「発見するためには自分自身に誠実でなければならない」。

(一九〇九年二月二五日)

(次章へ続く)

十一 雪 (LA NEIGE)

「大変良い天気の後には雪です。もう木の芽は開いているのに。私は葉の先をちらっと見ました。そして乾いた草の中で座ることが出来ましたが、そこは風からの避難所です。柔らかな緑色の布地のような繊細な襪に一番近い所で、考えるためであったのです。でも、ご覧なさい。只、灰色一色の雲が地平線の端から端へ広がっています。時折、霧となって頭上に広がり、大地まで降りて来ます。その時は何が起きているのか良く分かります。雲が大地に止まっているのです。雲の層は毎日大きくなって行きます。直ぐに橇で行かなければならなくなるでしょう。そして、三月です。本当に自然は狂っています」。

パングロス博士は答えます、「自然は決して狂っていないのだ。この雪は丁度良い時に降ったのだ。私は待っていた。何故なら、太陽は澄み切った青空に輝いていたので、水蒸気が大地から上昇して行くのは自然だったからだ。暖かい空気が昇って行き、冷たい空気が北極から赤道へ大きな河床のようなものを作るのも自然である。そして、太陽が暖めれば暖める程、この大きな河床の流れは数多くなって行ったのだ。このことを良く想像してしてくれ。冷たい空気の河は、北から南へ大地を滑るように進む。暖かい空気の河はその上の空気中を滑るように進むが、反対に進むのだ。そして眼に見えない蒸気で一杯である」。

パングロスは言います、「その後で、何らかの渦とか旋風を想像してご覧なさい。これらは二つの大きな空気の大河が反対の方向へ流れるような時に、生まれるべくして生まれたものだ。或る時は冷たい河が穴に落下し、又或る時は山にぶつかる。それらの境界上では冷たい空気と暖かい空気の混合が行われているのだ。先ずは水の雫となって全てが突然に落下し、次には氷の繊細な針になり、暖かい空気の中では水蒸気になって姿を隠す。そして、これらの針は落下し始め、更に小さくなればそれだけ益々ゆっくりになる。そして、このようにして何時間かの間に地上に到着する前に、水蒸気になって新たに四散して仕舞うのだ。その結果、雪の霧が私たちの頭上に広がる。それから、その下にある空気は水蒸気の塔に成長し、氷の針が大地に接近する。晴れた朝に私たちは雲の中にいるのである。雪である。そして、何故今は雪なのだろうか。まさしく太陽が輝いていたのは、別の週だったからだ。何という驚くべき秩序、何という正確な機械なのだろう。降りなさい、正確な雲よ！ 降りなさい、合理的な雪よ！」。そして、パングロスはオーバーを揺すって、顎髭に氷の塊をつけて笑いました。それは雪を罵ることよりも、ずっと増しです。何故なら雪はそんなことを気に留めないで無視しているのですから、そのことを良く分かって下さい。

(一九〇九年三月五日)

十二 情熱 (LES PASSIONS)

男性も女性も何故昔は剣闘士の戦いを楽しむことが出来たのでしょうか、と私は尋ねられました。私はそんなにも昔のことを言わずにいました。汚れた犬を溺れさせずに平和を愛する男性たちが、何故戦場で殺し合うことが起きるのでしょうか、と今度は私の番でしたので尋ねることが出来ます。多くの人々が言った後で、風習は全てを解決し、制度は大したことが出来ない、と私は屢々言いました。しかし、多分それは間違いです。人間は自分自身では善良でもなければ意地悪でもありません。状況次第です。そして個人よりも大衆としての真実の方が一段と真実があります。恐らく、風習よりもずっと不安定なものは何もありません。

村に火災が起きました。週に三回も酔っ払い、喧嘩を売って、女房に手を上げた野獣のような男性が、今度は火事と戦ったのです。彼は炎の中を壁によじ登り、斧で梁を打ち壊し、長靴からは煙が出て、眉毛や髪の毛は焼き焦がれています。彼は英雄です。

何年か前に、フランス人たちはイギリスのボクシングの試合に耐えられなかったようです。今では優しい女性も普通に見に行きます。黒いあざのある眼に拍手します。口笛も良く吹きます。全ては最高の動き次第です。フランス人という群衆の感情は、雪崩のように離れて行きます。

それ故に見世物の興行主は何時もさくらにお金を払います。そして、もしお金を貰ったさくらたちが率直で、感情の波の反響と同時に騒音も送っていられたなら、群衆は何時もさくらたちに従ったことでしょう。

平和と戦争も同じ法則に従います。藁の山を燃やすには、小さなマッチの炎で十分です。この小さな炎がなければ、藁の山はその儘ですし、鳥たちはその藁で巣を作ります。戦う準備が出来ている人々は、一日その儘生き残りますし、十日生き残り、戦うことがなくなり、犁で耕す生活を送りながら歳を取ります。平和が可能なのは平和であるからです。しかし、政府という狂気は全てを変えることが出来ます。突然に、別の風習になるのです。装鞍ラッパが鳴る時、農夫は胸甲騎兵になるでしょう。一生懸命です。売春婦たちも人間的な顔になります。人殺しも同じです。

先日、私が馬車に乗った時、馬は眠っていました。繋がれてもいませんでした。その馬は小走りに駆け始めましたが、道は下って曲がっていました。ブレーキは良く効かないようです。馬車は馬の腰を押し、曲がり角で馬は口を歪めなければなりません。全速力で走りました。そして、私は既に峡谷の底に来ていました。登り坂で馬がついに止まりました。馬は再び眠り始めました。馬がギャロップで走ったのは、馬が走ったからです。眠ったのは、眠ったからです。

以上は、情熱から出たイマージュです。水蒸気は私たちのために働きますが、もし栓がうまく回らなければ、ボイラーは吹っ飛ぶでしょう。しかしながら、全てを助けるためには、ほんの小さな指の動きと思考の閃きだけではなかならなりません。

(一九〇九年三月六日)

十三 カトリック教と情熱 (LE CATHOLICISME ET LES PASSIONS)

文明とは何でしょうか。それは確かに工場のシステムではありませんし、要塞のシステムでもなく、法律のシステムでもありません。高炉や大砲やギロチンは全てが実際に残酷な事態を引き起こすことができます。燃え上がり、雷のような音を出し、血まみれになるこれらのものの外見は既に、十分に野蛮で残酷です。

文明とは、情熱と反対のシステムです。私は、人間が自分自身の裡に見出す動物的な力を情熱と呼びます。もしも情熱が鎖で繋がれていなかったなら、知性と意志のある行動を妨げます。性的欲望や怒りとはそのようなものです。人間のドラマは全てがこれらの息子たちと共に創られます。全ての悪徳や犯罪は冷静な頭脳と反対の、感情的な胸や腹が同盟を結んだ結果です。

バルザックのテーマとは、カトリック教は人間が動物であることに反対した驚嘆すべきシステムであるということです。最も美しいものとはこの人間であり、善意を判断して遵守し、王のように立派な布地の裏を見せていました。最も卑しい情熱は道徳的秩序という外見と、何と非常に良く一致していることでしょう。熱心なカトリック教徒の王や司祭や司教に仮装した端役の真ん中で、男と女たちは何時でも恐ろしいギリシア悲劇を、偽善や呪詛や毒や短刀と共に演じています。バルザックという国にいる男たちについて考えて下さい。ド・マルセイは怪物です。デ・リュポールは卑しい悪戯っ子です。マクシム・ド・トライユは大変に洒落た服装をした強盗です。パリの王妃たちは情熱に身を任せます。彼女たちは、男たちとの遊びによる借金を払うためにダイヤモンドを質に入れます。かくしてバルザックは、バルザックに反駁します。カトリック教には恐らく、襟を正すのが下手な情熱に反対する力がありました。その上、カトリック教徒は歴史を編曲するのを忘れませんでした。彼は何時もほろ酔いのノアに、偽善のオーバーを投げることに出来ませんでした。

しかしながら、私はその点については考えません。考えた結果は情熱の力になるに違いありませんでしたし、教義とは反対の方へ行くに違いなかったと認めるようになるでしょう。それ故に、もしも何処かの町の大御所が四つ辻で福音書に従って簡素さと純粹さと平等を説きながら、悪しき金満家や彼らを餌食とする人間たちを教会から追い出したなら、私はその人間に敬意を払い、その神学を許します。しかし、現代の四つ辻の説教師たちは、如何なる教義なのでしょう。彼らは貧しい者たちに反対して教義を説き、財産の不平等のために説いています。彼らはギロチンや戦争や無為や贅沢のために説いています。彼らには女優がおりますし、カード遊びをする人々、異性と遊ぶのが好きな人々、レースをつけた貴族たち、そして手紙を書く従僕がおります。全員が十字架の周りに群がる〈未開人たち〉です。〈カトリック精神〉のないカトリックのシステムです。〈神〉がない〈宗教〉です。彼らの多くは〈カムロ・デュ・ロイ〉(1)の人々です。彼らは偽物の宝石を売っているのです。

(一九〇九年三月七日)

(1) 雑誌『アクション・フランセーズ』を売っていた王党派の行動隊。

十四 王たち (LES ROIS)

古き良き時代を惜しみ、新時代を心配して恐れる人々がおりますが、彼らが恐れるものを私は大変良く理解しています。彼らは君主制を惜しんでいるのです。そのことを彼らは言いません。恐らく、そのことを良く分かっていないのですが、その通りなのです。

昔は実際に権力者たちがいて、権力者たちには宗教的な敬意がありました。軍隊の偉大な隊長たちは、祈りと供物を二十五世紀も前から受けてきました。彼らは不死身で、永遠であると信じられていました。その当時、ライオン使いに似ていた彼らは、群衆に対して鞭を高く上げていたのです。大胆さが力よりも強かったのです。何ものにも恐れぬ者には、誰も敢えて何かやる勇気はありません。野心家や狂暴な人や好色な人の群であるなら、王と結びついた利害関係のある沢山の突発事件をつけ加えなさい。それらは人に命令するためにしか王に従わないのであり、平和に暮らす羊の群と共に不正を働くためにだけ、王と一緒に正義でいたのです。自己本位の権力とはその様なものです。演劇や歴史の話の中で見せてくれるのもその様なものです。

現実に、専制君主たちは人が信じている限りでは、力が無いのと同じ位に自由も無いと私は思います。専制君主たちは何時も、味方や群衆を考慮に入れ続け行きます。ライオンが調教師を捕らえて血に食欲を抱くのは、一度ならずありました。それでも多くのライオンは、健康に太った犬のように、諦めて輪の中を通ります。多くの調教師が、ライオンよりも力があるとの思いを持ちながら、ベッドの中で死んだのも事実です。

かくして間違った話や演劇の壮麗さや最も沢山ある抑制された思考によって、今日でも野心家たちが生まれています。彼らは世論にへつらい、最も多くの人々の言うことを聞いて出世します。その他の専制君主たちは、自分の力に酔いしれて席を譲ります。しかし、これらの教訓は直ぐに忘れます。外見だけの美しさと衣服と動作が、判断を腐敗させます。沢山の上演後に、端役は彼が大した王ではないと考えます。しかしながら何時かそのうちに、彼は緋色のコートや冠を取り戻すこととなります。演劇の兵隊同様に、王と臣下というものは、彼らが良く望んでいてもいなくても、従うしかないと理解しなければなりません。人は納得と賢明さと公平さから管理するのです。そこに王はおりません。決してそこに王はおりませんでした。

(一九〇九年三月二四日)

十五 フィレアスと権力の原則 (PHILÉAS ET PRINCIPE D'AUTORITÉ)

私はル・R. P. フィレアスと知り合いになりましたが、彼はゲートルを巻いて棒を持ち、一種の郵便配達人の鞆を持っていました。彼は言いました、「私は郵便業務に就いている。そして私たちは殆ど変わることがない。私たちは何時も私たちの制度を、あなた方のものよりも当てにしている。しかしアランよ、あなたは忙しくて手がふさがっている。第一に、あなたに手紙はもう届かないからだ。取分け、あなたの教義は支障を来すからだ。制度も同じだ。子供っぽいのだ。繰り返して言うが、力なき秩序は決して無いし、絶対的でない力は全く何にもならない。素朴な人の信念や職人に、もたれかかるしかないのだ。というのも結局、あなたは否定しなくなるからだ。それが現実である。郵便局員たちは最早、服従したくなくなるのでしょうか。まあ、彼らは服従しない。市民聖職者たちは睨み付けるが、手紙の区分を早くすることはない。明日になれば、今度は鉄道員たちの番で、服従するのを拒否するだろう。あなた方は、兵隊たちも服従を拒否する日まで、彼らを兵隊に取り替えることだろう。そして、そのことは戦争を生む何かになる。社会生活は遊びではないということを良く分かってくれ」。

私は彼に言いました、「そうです、地獄の恐怖は軽蔑すべき作り話ではありません」。

フィレアス爺さんは再び言いました、「あなたは少なくとも、それが人間の作り話なのを知らないのが条件であると言った。それ故に私は、その全てが作り話ではなく悪魔を信じているのを良く分かってくれ」。彼の灰色の眼はきらきら輝いていました。

私は彼に言いました、「悪魔はあなたです。あなたは人間の怠惰や弱さや間違いや情熱に賭けます。私はあらゆるものの中庸や良識に賭けます」。

「あなたは損をした」とフィアレスは言いました。

私は彼に答えました、「私はまだ損をしませんでした。一つのことを気を付けていたのです。それは、賢明で正しい大人物は服従させるのに脅す必要がないということです。火事の際は火事の音を聞き、状況を理解するや否や次々に賢明な指示が出されます。それ故に、此方の家でも彼方の家でも良識を磨くことしか重要ではなく、全てが上手く行くでしょうし、悪魔が口を出すことはありません」。

彼は言いました、「そうです、しかし火が付かないということはありません」。

私は彼に言いました、「他の例も聞いて下さい。グランド・エコールのことです。校長は無知で怠惰で気まぐれです。職業のことは何も知りません。特別待遇でそこへ到達したのです。毎日のように規則を変え、説明し難い気まぐれによって部下を評価します。結果は恐ろしいものですが、人は彼に従いません。それは沈黙であり、無気力であり、直ぐに反抗を生みます。心の中では既に反抗しています。よろしい、校長は最後には免職になります。後任者は学問があって公正で、自分の職務を完璧に熟します。自分自身が実行しないことは何も命じません。彼の一つ一つの忠告は、部下が自分自身で長い間抱えてきた疑問に答えるものでした。部下たちは、服従すると考えることもなく従います。秩序や英知の力とはそのようなものです」。

「ユートピアだ、アラン。そんなのはユートピアだ。人間とは決して聖ヨハネの子供ではない。

歴史を読んでくれ」。

私は彼に言いました、「あなたが言う歴史は、宮廷人が書いたもので、王や大臣を擁護したものです。職人や商人や銀行家の偉大なる英知がなければ、陰謀家や喧嘩好きの一撃では如何なる秩序も決して維持して支えられない、と私はまさに断言します。秩序が存在したのは、多くの人々がそれを愛し望んだからです。

そして、政府が秩序や正義や法を愛する日に、統治された人々もそれらを愛する限り、全て上手く行くでしょう。それというのも多くの人々が、もしも混乱よりも秩序の方を好んでいるのが本当でないとしたら、文明は不可解で説明し難くなります。人民の声よ、神の声よ。悪魔よ下がれ！」。

(一九〇九年三月二九日) (1)

(1) アラン研究所の全集(一九九四)によると、このプロポの正しい日付けは一九〇九年三月二七日である。

十六 知識の会計係 (LES TRÉSORIERES DU SAVOIR)

お金持ちたちが貧しい人々に教育を与えるのを決める話をすると、職業や奉公や職業学校のことしか話しません。慎重に考える教師たちは、何時の日か、指物師や掃除婦や料理人がいなくなるのではと心配しています。

貧しい人々に同じことを話すと、あなたは全く違う話を聞きます。彼らは言います、「職業を覚えることは無知な儘でいることであり、奴隷の状態になることです。そうではなくて、私たちは自由でいたいのです。少なくとも知性的な教師でいたいのです。私たちは全く単純に息子や娘たちに教育を望みますが、それは本当の教育であり、物事や人々を理解する手助けになるものです。余計なものでしょうか。言って下さい。そうです、表面的には余計なものですが、でも実際には、それは必要な食物であり、奴隷状態を批判したり、その様な状態を取り除く力を与えてくれるものです。科学は石を持ち上げる機械を作り出しました。私たちは不正を片付けるための梃子を発明しないかどうか、誰か分からないでしょうか。しかし、先ずはそのメカニズムを教えてください」。

専制君主の魂も持った人々は、何でも全く冷笑的に答えます、「そうです、私に反対する武器をあなた方に与えることはないだろう」。しかし、自分自身に誠実でない他の人々は、少しはあなた方に反論があります。彼らは言います、「もしも全市民が教育されたら、〈思想〉とか〈文書〉とか〈会計〉にあらゆる地位を望むでしょうし、手仕事を見捨てるでしょう。それは、もしも誰かが研究が好きで空腹で死んだとしても、同じ位にもっともなことなのです」。

私は今、害を与える偏見を理解しています。それは教育が地位を与えなければならないということです。人が学問するのは如何なる考えがあるのか私には分かりません。それは偉大なる秘密のようなものですし、理解することは困難です。それはオリンピックの冠のようなものであり、多くの人々が勝利したいと思っている競争での賞のようなものです。そして確かに、学問が〈公教育〉で行われるようになり、巧妙であって未開の言葉です。訳の分からない中国語のような言葉の壁で防御するようになります。それをよじ登って幾何学や代数学が可能になるのです。教師である私の役割は、障害物の柵を高くすることです。何故なら、全ての人が目標を達成する必要がないからです。私たちが人に与えるべき地位は少ししかありません。

学問は、それ自体が正確であるという思想に到達しなければならないでしょうし、それが全てです。学問は全て手の届く処にあらねばならないし、良識を磨くしかないでしょう。宝籤にお金を使うのではなくて、全ての人々に平等に普及させなければなりません。人間が無気力になって必要なことしかやらなくなればなる程、学問は必要になって来ます。何故なら、手を差し伸べなければならないことに埋没するのが、その人であるからです。それに倣って最も無知の人々や才能がない人々を教育しなければなりません。私たちは何時も裕福な人々にそれをあたえているのです。最も学問がある人間を教育しているのです。学問は、運命を平等にすることからは程遠く、まるで貴族の高位聖職者を生んだように押し進めているようです。免状を取得することは、同時に人を軽蔑する権利を手に入れることでもあります。エリートは寺院に閉じ籠もり神託を

下して、人々を教育することよりも驚かせているのです。神は死にましたが、司祭たちは生き残っています。

(一九〇九年四月二日)

十七 演壇の効果 (EFFETS DE TRIBUNE)

〈地位〉についての最近の論争中に、あなたは大臣が高慢に荒々しい言葉で次のようにはっきりと言うのに注目しました、「私を信用しない者がいるかどうか、私は良く知りたいのだ」。勝利に酔ったり、敵の頭蓋骨で飲んだ蜂蜜水に酔ったりするメロピング朝の人の声が聞こえると信じられているのでしょうか。

もしも私がおその日に、代議士の議席にあったなら、少し次のような話をせざるを得なかったように思います。私は大臣に言うでしょう、「あなたの誠実さを疑うのがもっともと思う日には、私は疑う権利を要求します。あなたが言いたいことは、私は良く分かるのですが、それは私の喉をかき切って殺そうとする日です。そしてもしも今、それが行われたなら、私もあなたと同じ位に怒りを覚えるだろうと思って下さい。しかし実際には有権者たちは、私が賛成しない人々の行動に反対して剣で戦う権限を決して与えませんでした。それ故に、全く何の理由も無く、あなたがとった好戦的な態度を良く考えてみて下さい。あなたに信用があるのが確かであれば、疑いや当てつけを恐れるものは何もないでしょう。あなたに従って疑いを無に帰するのは大変に容易であり、国民の代表に委ねて全く単純で簡潔にするのも容易です。そこには私が是非言いたいことがあります。それは有権者が当選者を足蹴りにしないことを十分に自覚するためのものです。そして報いとして、少なくとも私が確かめたり疑ったりする権利を確立するために、金銭面の調査を要求します」。

以上は、私が代議士であったなら言ったであろう内容に殆ど近いものです。でも以下は、同じ主題についてのお大臣の話を、私が如何に理解しているかです。

「皆さん、私は私の正直に反するものを何か仄めかすことを読みましたし、あなた方も多分、私と同じように読みました。私は滑稽にも自分の胸を叩いて過ちを告白したり、自分は正直であると声を大にして宣言したりしないでしょう。大泥棒も、もしも単に喜劇俳優であったとしても、同じことを言うとお私は十分に分かっています。更に、何故私は憤慨するのでしょうか。会計検査官が帳簿を調べるや否や、会計係は憤慨するのでしょうか。いいえ、そんなことはありません。私は少なくとも次のことをあなたに言います。もしもあなたに嫌疑がかけられていたなら、躊躇してはなりません。会計検査官があなたに要求して、納得の行く説明や証明を全て私の管理行為として与える準備は出来ています。私は、疑いも仄めかしも怖くありません。それらが調査によって現れたとしても、あなたの嫌疑を晴らすように答えます。反対に、もしも私を調べるのを断念したなら、最早嫌疑も仄めかしもなくなります。いずれにせよ、あなたはご自分の義務を行うでしょうし、私は私の義務を行います。私はあなたに対して責任が無いのでしょうか、そしてあなたは私の検査官ではないのでしょうか」。

そういう訳で、私は議会の討論というものをありありと思い描きます。そこでの言葉は、大臣たちが〈国家〉の代理人であることが制度として認められているのです。現代は最早、ソワツソンの高級な花瓶の時代ではないのです。演劇の舞台に在るのであり、演壇に在るのではないようです。フランク王国の王クロビスが次の様に言って剣を楯に叩くことが出来るようなものです、

「もしもここに喉を切らせたい者がいるなら、そう言えば良いのだ」。

(一九〇九年四月九日)

十八 何故革命か (POURQUOI LA RÉVOLUTION)

その労働者は話しました、「私はゼネストや大変革についての話を何度も聞いた。それらの話は私には間抜けに思えたが、その理由をあなたに言いたい」と彼は言います。ここにも少しは騒ぎがあり、大声を出す人間が何人かいますが、決して用心することはありませんでした。

彼は言います、「あなたは私のことを知っている。私がスト破りの労働者でなく、カトリック信者でもなく、シヨン運動家(1)でもないことをあなたは良く知っている。私がこのことを言うのは、そういう人々を軽蔑しているのを聞かせるためではなく、単に彼らのように考えないからだ。〈精密作業〉に関する最近のストライキの時も、私は首謀者の中にいたが、その理由は私の職場のことだったからだ。私は、或る時は臆病者に、或る時は憲兵に怒った時が一度ならずあったことを敢えて言う。そして地位を諦めたことも二回あった。それもストライキを当てにしているのをあなたに言うためであり、私の利益が出る範囲で使用者に回答を出させるためには、少しは脅すこともあった。

その上、仲間たちがいたし、私たちは怒りっぽい子供のように何度も戦うのだと思う。平静でなければならないのだろう。そのためには貯金が必要なのだろう。私たちの運動計画の本当の目的もそこにある。〈労働組合〉へお金を払い込むこと、協同組合へお金を払い込むこと、他の同業組合が私たちを助けることもあるのだから、彼らを助けることである。一言で言うなら、ストライキのためのスूपを十分に用意して置くことであり、そこには道具を使いながら朝から晩まで思考せねばならないと思うことがある。これらの方法によって、財産の分配に与ることが出来る有益な変化というものを私たちは手に入れるだろう。何故なら、何もしないで暇な資本家の利益はだんだんと小さくなっていくから、彼は生産を始めるだろうし、そのことは私たちの重荷をそれだけ軽くするだろう。財産の増加、経営者及び金利生活者は少しずつ贅沢な出費で財産を減らして行くだろうし、かくして労働者を養っていたかのように見えるが、実際は飢えさせている彼らの不必要な労働は消えてなくなるだろう。それが私の見通しである。そして、私はブルジョアに優しくないのが、あなたにはお分かりである。

しかし、あなたが権力を握ることや財産を共有化することについて話す時、止めろ、馬鹿な者たちが言い始めたことだ。権力だって？ 私たちはそれで何を作るのだろうか。恐らく、他の誰かが作るものだ。私たちには議会があり、大統領がいて、他にも憲兵や裁判官もいて名声も上がっている。それというのも、何故あなたは権力を作りたいのだろうか。財産を作りたいからか。それで私たちは何を作るのだろうか。私たちには多くの指導者や技術者や発明家が必要だろうし、お金を支払い、監督しなければならないだろう。名声は殆ど重要ではない。基本は、利益の分配が公平であるかである。私たちが支払う以上に、社長も支払い、社長の荒稼ぎがなくなる日には、問題は解決するだろう。でも地主が地主でなくなることはないのだ」。

(一九〇九年四月一七日)

(1) シヨン運動家とは、社会主義的カトリック運動家のこと

十九 率直さだろうか (SINCÉRITÉ ?)

「私は心から信念のある人々を尊敬する」。それは大変に役に立った決まり文句であり、多分私が冷静に議論する日になって、自分自身に役に立つことになります。又、別の日に私は、少なくとも人の意見を良く理解するとは思えなかった堅物の男について、次のように言っているのを聞きました、「彼は正直な男だ」。この言い方は、殆ど正しい認識がなされていないように見えます。

人間は公然と害のある意見を表す、ともし言いたいのであるなら、彼には勇気があると言わねばなりません。率直さとは違います。率直さは内面的な美德です。各人の意識の中に隠されています。私はその姿を知りません。従って私は何時も、意見は率直であると思います。そうであったかの如く吟味し、その上その意見そのものの価値については全然私に教えてくれません。

それ故に率直でない意見を言う人はいるのでしょうか。それは狂人たちであると私には見えます。彼らは決して釣合いを取りませんし、躊躇もしません。彼らはあなたを非難します。「私はあるが儘だ」。しかしながら、この様な率直さは如何なる検証も許しません。

従って、私は釣合いの中で率直さを絶えず抛擲する人々を信用しません。そこから彼らが何時も聞いている儘にしているのは何なのでしょう。それは彼らが何らかの教義に執拗に結び付き、彼らの情熱は炎が鉄を柔らかくする如く、それらの証拠を鍛えて変形させるものです。善き美德とは、発展の中にその人間を止めることです。善き美德とは、思想が監獄や要塞になります。そして、私がそれを検査するために教義の中に入る時、あなたは何故私がドアを閉めて窓から鍵を投げるのを禁じるのでしょうか。私の考えでは、知的健康は多くの慎重さを要求しますし、何時も闘争や征服を行うのではなくて、散歩を行うことでもあるからです。

私たちは一度に少しの考えしか理解しませんし、それらの考えを細かく検討すればする程、思考は狭くなります。他を見ないで何時も同じ場所を掘る人々になり、家は崩れて仕舞います。その家には永遠が住んでいたのです。それ故に観念の中で、私は右も左も見ないで長く掘ることは決してありません。一つの証拠として私が自分のピックに確信の重みを感じたなら、今にも皆が飛び掛かりそうになります。何故なら、たった一つだけの証拠とは何でしょうか。一つの観念とは、二つの観念とは、三つの観念とは何でしょうか。それらを全て持たなければなりませんし、各々の生活だけでは満足出来ません。

良い考えを生む頭には、この点で変わるべきものが沢山あります。何故なら、私たちは僧服を着ていようがいまいが、頑固な修道士たちによってすっかり養成されて来たのです。彼らは剣を使うように観念を使います。そうです、一つの観念に執着し、反芻し、その周りで草を食べる杭に似て来るや否や、一つの観念に疑問を抱きます。信仰そのものに厳しくなること、自分だけの気質に抵抗すること、自尊心や頑固さやそれらを非常に良いものに変える率直さを覆い隠す精神の怠惰を引き離すことは、恐らく最も完全なる率直さです。最も知的で稀有な美德であり、最も崇高な英知です。主任司祭はそれを懷疑論と命名します。私は寧ろ、それを活気や生命と命名します。さあ行こう、怠け者よ。自分のベッドに就きなさい。そして動きなさい！

(一九〇九年四月二七日)

二十 女性のための道德の先生 (MAITRES DE MORALE POUR FEMMES)

私は、現代の堅苦しい道德家と知り合いになりましたが、彼は立派なあごひげを撫でながら私に言いました、「私たちには現在、大変な心配種があります。セーヴルやフォントネーで、将来女性教授になる道德の先生を探しているのです。知的で、高い教養があつて、誠実で信用があり、教育経験がある人物は沢山います。しかし、もっと何かがなければならないのです。その教師には一寸した布教者の力が与えられていて、説得させて感動させる力と或る種の熱い心がなければなりません。宗教的な信仰心という救済に余り縁のないこれらの女性たちは、人生において重い義務と恐ろしい誘惑を前にして、多分少し孤独を感じるようになるでしょう。観念の冷たい光以上に私は気高い熱狂の炎の音を彼女らに聞かねばなりません。それはまるで自然の力の印のようです。道德の最も明らかなのは恐らく心の部分であり、心を深く感動させるものです。女性たちにとっては、それは本当に倍あります。私は教師以上の人を探していますが、実際には良心的な校長です。その様な人間は稀有であり、古代ギリシアの哲学者ディオケネスのような人を探しています」。

私は彼に言いました、「そのことを私は理解します。あなたは説教をする優秀な修道士を探しているのですが、その人は〈荘厳ミサ〉風に俗人の風俗を歌います。あなたは長衣のスータンを着ていない聖職者を余りに探しすぎます。その視線は心の奥まで透かして見たがり、そして彼は看板のように美德を支えています。私はあなたが言いたいことを良く分かっています。聴罪司祭がいなくて、頭の中で踊っている学問のない哀れな女性たちは、愚かな上に更に愚かなことをするでしょう。それは誰であるか知っていますか。恐らく、彼女たちは自分自身で判断するまでになって、哀れな考えを大胆に自分の行動で調整することになるでしょう。もしも彼女たちが、生徒たちを同じ原則で教えたらどうなるでしょうか。全ての女性たちは、自分自身に向かって行って、男性たちと思考したり望んだりする権利を争うことになると思いませんか。以上は、あなたが自分に感心する先生よりも自分を理解している先生の方を好む理由です。以上は、司祭でなければならない、信仰と教義を持っていないなければならないのがあなたの理由です。

しかしながら、選択しなければなりません。もしもあなたが光を恐れているなら、カトリックに戻らなければなりません。そして、もしも思想の自由が正義の限界に我慢しなければならないのなら、その時は思想の自由を削除しなければなりません。それというのも、知性は何ものも配慮しないからです。もしも知性を目覚めさせて置かならば、もしも少なくとも知性の眼を開けて置かならば、知性は全てを判断するでしょう。それは魂の買取人から逃れ、じっと見据えるような眼差しから逃れ、興奮しやすい雄弁術から逃れ、粘土を細工するように心を彫る専制的な意識から逃れます。魔術師の支配は終焉します。未来の先生は自分自身でしょうが、弟子たちが彼に似ることを決して望みません。彼はそれを望むことさえ禁じます。彼は気に入られることを用心します。少なくとも観念を捨てて、彼は一人ひとりが自分のやり方で成長するための養分を摂るようにします。あるいはその時、先生のごことはどうでもよくなります」。

(一九〇九年五月八日)

(次章へ続く)

私の友人で靴修理屋のジャックが私に言いました、「ロワジー神父のコレージュ・ド・フランスへの任命については話題になっているが、これからもなるだろうよ。それらの話は一人か二人の子爵を立ち止まらせることになるだろう。そして、学問と思考する自由と共和制のために闘ったのだと彼らは言うだろう。少なくともそれらの論争は、全てが哀れを催させる。福音書が間違っ
て書き写されたことを人々に教えるために還俗した主任司祭に報いることを、今でもやっているの
だろうか。私が福音書も、福音書の写しも嘲笑するのを良く分かってくれ。

私は〈学問〉を愛している。市民たちがどんなにか教えられてきたかが分かる大きな変化の数々を私は全く誤解している。私は本の中で、あちらこちらから〈学問〉の切れ端を、講演や庶民を観察した現場で押さえている。息子たちには私よりもっと沢山知って欲しいと思う。学者たちが自分で勉強したり、人々を教育するにはお金が必要であることを私は知っている。私は、自分がお金持ちでないとしても国民教育に年間十フランは出している。不幸にも私は、自分のお金から作られるものを知っている。歴史家や神学者や墓標になった作家たちを富ませているのだ。彼らは贗の冠、贗の彫り物、古い陶器を買っている。それらの物は全て人民を照らして導くためのものだ。そうだ、通りは電球で明るくなっている。しかし、頭脳はエジプトのランプで明るくなっているのだ。ヘブライ語をラテン語に翻訳する方法で、仲間たちと一緒に議論しながら、あなたは
その夜私を理解するだろうか。私たちはそんなものではない。ボンボンもビスケットも望んでいない。望むのはパンである。

〈宗教〉の仮面を剥がさなくてはいけないし、聖書の誤りを暴かなければならないと言われて
いる。しかし、愚かな仲間たちに関係しているために、三十年間は主任司祭でなければならな
かったのだ。〈宗教〉があり、詩篇があり、福音書がある。よろしい、私はそれらがあるが儘に受
け入れる。私が、受け入れるための何かを持っているかどうかを知ることが大切である。それで
私は正義や簡素さや理性を取り戻し、隣人にも善人でいられるのだ。善いものを見付けたなら、
私はそれを手に取るだろう。良識に反するものであるなら、私はそれを紙くずにして捨てるだ
ろう。しかし善いことか、馬鹿げていて私の関心を全く抱かないことか、それを言ったのはイエ
スか他の人か、それらを知るのが問題である。その問題は、話をして証明する人々しか関係して
来ないのだ。

歴史であれば、最もはつきりした問題でも曖昧にするに大変良い方法であるのを、あなたはご
存知だ。過去は全てが曖昧である。現在の私たちは全てが明瞭である。確かに、彼らが与えてい
る教育は、良く考える人間を妨害し、人々に言うための意見を妨害するのを目的と見做してい
ると言われている。勿論そうだ。もしも私が図書館へ行き、ヘブライ語を勉強して、私の若かった
頃を考える前に、二百冊の本を綿密に調べなければならないなら、そんなことは諦めていると思
ってくれ。しかし、それは本当ではない。そんなことはお金持ちの嘘である。私は良く知っている
が、物事についての正確な知識と共に開始するために、次にお金持ちやサラリーマンや産業や
商業についての正確な知識と共に開始するためには、私は靴の皮をすつかりなめしながら、考え

始めることが出来るだろう。そして私が、四人の子供たちと一緒に家に残って一日中縫い物をして二十スーのお金を稼ぐ母親を見る時、何もかも上手く行かないと結論を下す代わりに、神は三人であるか一人であるかを、私は知る必要がないのをあなたは知っている。イエスは神だったことにして置こう。ところで、もしも靴修理屋が誠意を遵守して考えているなら、イエスは靴修理屋に話をするだろう。ね、いいですか、良識に反する紙くずは少なくとも短靴を包むには良くありません」。

(一九〇九年五月十日) (1)

(1) アラン研究所の全集(一九九四)によると、このプロポの正しい日付けは一九〇九年三月十二日である。

二十二 フィロドクスは正しい主義を持つ (PHILODOXE A DE BONS PRINCIPES)

道徳の教育について議論がされていました。アリストは僅かに革命的な正体を現しました。彼は言いました、「私たちは今でも神学者のように考えます。掟としての道徳を絶対に持ちたいのであり、一人ひとは綴りを習うように自分の義務を学んでいます。戒律とはこの種のもを集めたものです。その中でも公教要理は別です。それらの書物は、一般の人の道徳や合理的なことと一緒に理解すべきものは何もありません。私は、道徳というものにおいては絶対的な原則しか分かりませんし、それは真実と思つたものに従つて行動すべきであり、出来るだけ正しく判断するために訓練すべきものです。そこには義務があります。その中で規範が述べられますが、沢山の形式が出来ます。何故なら各々の特殊な場合は、そこで厳密に適応される解決が望まれるからです。例えば両親に従う方法は沢山あり、その従順にも沢山の段階があります。それは両親の学識次第であり、知恵や情熱や習慣次第です。道徳的生活に入ることは、まさに規則から解放されることであり、自分自身で判断することであり、そしてその中で決定し、そのためにしか従わないことです。そんな訳で、道徳がない教育でも、教育のない道徳よりも道徳的です。合理的でありなさい。自由になりなさい。自分自身でいなさい。あなたが理性によつて話す時は、権威や風習や世論を恐れてはいけません。それが道徳の本当の原則のように私には思えます」。

アリストはこのように話しました。アリストが良心的で誠実な人間であり、決して陰謀を企てず、所属している人々に諂つたり、競争相手を中傷するのを聞いたことがないというのは正しいことです。それ故に彼の話は好意的に迎えられるました。

幸いなことにフィロドクス老人は目覚めていました。起床して感動した声で言いました、「私は新しいものを疑う。良いものは良い。そして義務は何時も変質することのない文字で書かれていて、何時も同じものであり、それは正直な人々の意識の中にある。神でもなく、先生でもなく、それは言うだけなら簡単である。個人は情熱や興味を直ぐに正当化させ、時と状況に応じてルールを作るだろう。しかし、義務はそうではなくて、決して柔軟ではない。榮譽のある人は決して柔軟ではない。何処でも何時でも、榮譽のある人の偉大な道徳とは、超人的な法則の前に敬意を示して従うことにある。もしもその名があなたの気に入らないとしても、決して神の名を呼んではいけない。〈理想〉を言いなさい。〈善〉を言いなさい。そして、その法則は私たちに明るく照らして導く灯台のように個人的な意識の上に輝いているのだ。学問は、絶対的なものを追求するのを断念した。しかし道徳の意識はそれを見付け、理解する前に崇めるのだ。私たちの上には〈絶対〉があり、私たちの中には〈信仰〉があり、もしも私たちが砂上の樓閣を望まないなら、それらが基礎になってその上に道徳の大建造物を建てるだろう」。

喇叭手がいる騎兵隊のように全ての人がお辞儀をします。フィロドクス老人が政治の敗残者になったと言うのは当たっていますが、彼は陰謀でのし上がり、時流の求めに応じて党派を変え、生涯で三行と書かなかつたのに書物の作者になつたのは一冊どころでなかつたというのは当たっています。その代わりに彼は、あなたにも良く分かるような主義を持っているのです。

(1) アラン研究所の全集（一九九四）によると、このプロポの正しい日付けは一九〇九年五月十日である。

二十三 陰謀家 (INTRIGANT)

私が学生だった頃、国務院とかその辺の機関と重要な関係があるに違いない青年と知り合いになりました。その頃の彼は既に色々な人との約束で一杯でした。或る日の夜、私たちは先生宅で、学会の何人かと正装で夕食をしました。私たちの仲間の一人の会話は活発で、隣席の一人とも一緒に話が弾みましたが、私たちはその人を良く知らなかったことに気付きました。隣席のその人は貝の専門家でした。その若者の未来は悠然としており、それが仲間のためにもなると知って、その人は自分の書物を捲っていました。貝の論文は未だ詩集よりも読まれていません。それ故、その老人は仲間の若者に大変満足していました。半年後に、その若者は自然科学分野の学士号の資格を取得しました。そして老人だった自然科学者の好意が、その時、彼にはまんざら役に立たなかった訳ではないのが分かります。この様にして彼は生きて来ましたが、何時も走っていて、何時も頁を捲っていて、何時も微笑していて、何時もお世辞を言い、何時も自分の足を掛けて少しでも高く出世するための僅かな場所を探していました。この役人仲間の登山家は、私たち全員から軽蔑されていましたが、そんなことは彼には関係ありませんでした。あなたもご存知のとおり、彼は大変に強い男でした。

或る日彼は、私がどんな大人物も知らないのを理由に、下らないと思った書物を一冊ぞんざいに処分しました。その書物は学会での本の値段の三分の一がやっとでした。その後、彼は公立図書館でその本を評価して後押しする羽目になりました。その本は審査と引き替えに超人で清廉潔白で大変に素直な人の手に落ちました。しかし彼は駄本の頁を捲って、即座に彼を送り込んだ〈上司〉に答えて言いました、「私は不利な知らせを予想します。それというのも、この本の何頁かを読んだが、憤慨を和らげて誤魔化す悪戯が見て取れるからです」。〈上司〉は次の郵便物で答えますが、それは私が言う機会となったものです。そして品格の手本となるものです、「私はあなたに少し重要な間違いを改めるために、ぐずぐずしないで書きますが、あなたにとっては役に立たない仕事を行うことになるかもしれません。その結果としてあなたが見出すのは混乱です。あなたが検査すべき作品の中で代表作と見做す一冊です... (ここでの代表作は問題のある悪い本ということです)。つまりあなたのコレクションにいるX氏は、図書委員会報告の対象に選ばれました」。先見の明がある著者が、貝についての別の論文も時宜を得て読めるようになると、そこからも友人が出来ると信じなければなりません。彼の本は今では何処の公立図書館にもあります。これらの思い出から、何故偉くなった管理者たちは何時も尊敬されないかを究明した時私は思い起こしました。程度の低い阿諛やいかがわしい情事を行う下劣な性格は、最も高尚な誠実さや最も厳格な仕事の上にも大変良く齎されます。それは極悪であり、共和国にあっても治りませんでした。社会主義者たちは、どうすればそれが治るのか私たちに良く言うようになるでしょう。それというのも、事務所や専門家たちが統治されるのも、その時であるからです。

(一九〇九年五月十四日)

二十四 道徳と連帯 (LA MORALE ET LA SOLIDARITÉ)

以下は本当にあった悲劇的な話であり、私が聞いたものです。その時、郵便局員のストライキ(1)が通告されていました。それでも電報を打つ部局の局長は、大変に良く働き、大変に理性的な人であると言われていた一人の若者に直ぐに眼をつけました。彼は顔付きや動作が最も生き生きとしていて感動を覚えます。局長とは重要な人物で、仕事を良く行うことを愛し、自分から進んで若者に近付いて言います、「あなたには結局どうするのだろうか」。相手は答えます、「私は自分が臆病で仕事の裏切り者だと思います。以上が私の結論です」。局長は言います、「そうではない、あなたは理性的な人間なのだ。革命家たちがあなたに罟を張っているのを、あなたは良く分かっている。郵便局員の大部分の人は、自分の職場にいるべきであることをあなたは良く分かっているし、理解している。あなたは自分の関心が何処にあるのかをはっきり理解している。義務が何処にあるのかも理解している。勇敢に、そして簡潔にそれを行いなさい。人間になりなさい」。

その郵便局員は言います、「そうです、私は自分の義務を分かっています。そうです、私は人間になりたいのです。それはまさしく私が言って来たことです。今、私を当てにしている人々、私との約束を当てにしている人々がおりますが、彼らは私のために闘い、私たち全員のために闘っている人々です。もしも彼らが間違っているとか正しいとかしても、私は最早何も分かりません。しかし、私はこれ以上話し合うべきではありません。もしも各人がそのことを考えたとしても、最早連帯はないでしょう。そして、もしもそういう連中が自分の義務を忘れたなら、私もそれを忘れるのは正しいのでしょうか。いいえ、そうではありません。私は他に生計を立てます。それが最良の方法のように思います」。そう言って彼は立ち去りました。彼は免職されます。

私はこの話に心を激しく動かされ、沢山の躊躇いで不安になって、有名なセレブロフに会いに行きましたが、彼は高等教育学校で〈道徳〉を教えています。私は、彼が自分の注釈に従ったように、結局私たちの活動の最高法規としての〈連帯〉(2)の力に頼ったのです。

私は、彼にその話を語り、そして彼に言いました、「そこには英雄がいて、〈連帯〉の犠牲になった者がおります。彼は間違っているのでしょうか。もっともなのではないでしょうか」。セレブロフは耳を掻き、鼻の上の眼鏡をしっかりとかけ直しました。「〈連帯〉について人々はお互いに騙し合っている」と彼は言いました。

私は彼に言いました、「しかし、あの人は決して騙しません。郵便局員たちは皆が同じ規定に従っています。彼らは皆が同じ関心を持っています。彼らは連帯していますし、それは事実です」。

セレブロフは言いました、「はい、少なくとも言葉の上でふざけてはいけない。連帯と連帯があります。郵便局員たちは私たちとも連帯している。彼らは、私たちと一緒に社会を作っている。〈連帯〉の精神によってストライキに入る時も、もっと高度な連帯には背かないのである」。

私は彼に言いました、「もっと高度な連帯とは、どんな意味でしょうか。もっと高度なとは？」

セレブロフは言いました、「もっと広いということだ。」

私は彼に言いました、「それ故に個人を教えなければなりません。しかし、もしも彼がフランス国内やフランス国外の全てのサラリーマンと連帯していると言うなら、私は彼に何と答えるでしょうか」。

セレブロフは反論して言いました、「連帯は理性と一致すると言わねばならない」。

私は彼に言いました、「よろしい、私は大変気に入りました。しかし、もしも幾つもの連帯があったならば、そしてもし最も理性ある者に従ったならば、それは従うべき連帯ではありません。従うべき理性です」。

「そして、それを疑うのは誰なのか」とセレブロフは言いました。

私は彼に答えました、「あなたの聴講者たちです。何故なら、個人は自分の義務の唯一の審判者ではない、とあなたは彼らに言っているからです。そしてあなたは、〈連帯〉は問題を提出するが、それを解決出来ず、正直なところ一人ひとりが〈理性〉だけで解決しなければならないことを、私に言いに来たばかりです。最高の教訓がその時生まれます。最良を思考して下さい、そしてあなたは思考するように行動して下さい。その次に〈連帯〉は正しく合理的である、とあなたが思えるなら、〈連帯〉して下さい。さうでなければ、それを足で退けることです」。

セレブロフは言いました、「この議論は大変面白い。でも申し訳ない。汽車に乗る時間だ」。彼は去って行きました。

(一九〇九年五月二十日)

- (1) 郵便局員のストライキは、五月十二日から十六日まで決行された。
- (2) 連帯は、フランス共和国において宗教から独立した道徳のキーワードになっている。

二十五 特別待遇と利益 (LES FAVEURS ET LES INTÉRÊTS)

政治的機械は大変に大きくて複雑です。私は、時計の動きを説明する時計職人には感心します。更に想像力で、同じ種類の時計のようなアテネやスパルタやローマを分解し、又組み立てる歴史家たちを私はもっと感心します。彼らは昔、自分の足で歩きましたが、今では当時の時計職人の叙述や物語によって分かるだけです。私としては、一つか二つのかなり小さな歯車を何度も念入りに注視しなければなりません。歯車を動かす物に如何に取り囲まれて、押されている物に如何に押されて回転して関係しているのかを、私は見ようと努めます。それは制度や規定や法律についての根も葉もない小論文よりも、多くのことを私に教えてくれます。

私は人生の出発に際して、殆ど同じ学歴と野心を持った二人の若者を観察しました。将来は大臣になることを遠回しに言っており、それは出来る限り必要であるようなことを言っている彼らを私は眼にしました。必然的に、私は彼らの職務や策謀や恋愛の詳細には無知です。舞踏会へ行ったり、列車に乗り遅れたり、賭博場で大臣に会うような、どんな些細な出来事でも人生を変えることがあることを私も認めます。これらの若者たちのうちの一人が、役所で重要な地位の人物になり、高給取りになったのは事実です。それに対して別の一人は地味であるが確実な地位が与えられるべく今でも徒に全く小さな野暮用を頼んで回っています。後者の彼は運が悪いのを歎きました。私は彼に言いました、「あなたの仕事には偶然があります。どれだけ偶然を信じていても、恐らく偶然に恵まれません。あなたは貧乏です。あなたは要職にある従兄弟と無関係です。不動産もありません。あなたは理想的な結婚をして腹一杯詰め込んで、官僚の家系とか実業家と結びつくかもしれません。でもあなたは派閥の中で選抜軽歩兵にとどまります。あなたの才能は決して錨を下ろさず、重要視されませんでした。あなたは向こう見ずな冒険家です。つまりあなたは冒険家であると見做されます。反対に、もう一人はあなたのように舞うことから始め、あなたのように風を求めました。大地と結びつく何か確かな関係を良く観察して下さい。彼には裕福な従兄弟がいるのが私には分かります。その外に、景気の良い会社を経営する者たちがいるのも私には分かります。彼は結婚します。それを予期せねばならないような恋愛が、これらの権力や利益とぴったりと結びついていたのです。彼の義父が与えるのです。彼は愛情、縁故、そしてお返しされたり招待を受ける食事を通して与えられるのです。彼は大地という財布に繋がっているのではなくて、お金という財布に繋がっています。彼自身はお金持ちになることなく、高価なもので腹一杯にさせられます。人が望むように彼が知的であろうと、気儘であろうと、芸術家であろうと、夢想家であろうと、この輝かしい小鳥には足に糸が付いていて、快適な止まり木から遠くへは行かないでしょう。彼の力がやって来るのはそこからで、単に陰謀や特別待遇や幸運だけではありません。高い処を見たり遠くを見たり、その政治的機械は蠅が渦巻になっているように狂って見えます。もっと近くを見ることです。利益は時計の歯車のように噛み合っています。その時は、燕たちが遊んでいると思う時間でした。各々の燕は、私には見えない本当に小さな蠅を追いかけているのを、今では私も知っています」。

(一九〇九年五月二四日)

二十六 自殺 (LE SUICIDE)

自らの意志で死を与える子供は想像するに耐えられませんし、痛ましいものがあります。洞察力をもってこのことを思考し、この混乱に秩序を取り戻してみましよう。

人生は全ての者に与えられています。それは人生そのものによって与えられています。理屈からは何も生みません。旅行や富や成功や快楽からは幸せになれません。幸せであるから幸せなのです。幸福とは人生の味そのものです。苺には苺の味があるように人生には幸福の味があります。太陽は良いものです。雨も良いものです。あらゆる音は音楽です。見ること、聞くこと、味わうこと、触ること、それは一連の幸福でしかありません。苦しみや痛みや疲れでさえも、全てが人生の味です。存在することは良いことです。これよりも他に最良のことはありません。何故なら、存在することが全てであり、存在しないことは何も無いからです。もしもそうでないとしたら、如何なる生き物も生き続けられないでしょうし、如何なる生き物も生まれなかったでしょう。色彩は眼にとっての喜びです。

行動することは喜びです。知覚することも喜びであり、それは同じことです。私たちは生きることを決して咎められません。貪るように生きます。私たちは見て、触って、判断することを望んでいるのです。私たちは世界を広げたいと思います。生きる者は全てが朝の散歩者のようです。地平線まで段状に並んだもの全ては、私がそれを望むから意義あるものになるのです。さもなければ眼の奥をくすぐる位のことではしかありません。しかし、私は自問します。そこには小径があり、樹木があります。その青い線は、私が歩く丘です。劇場で良く眼にしますが、舞台装置家が一枚の布に着色して表すものです。しかし、私たちは直ぐにそれらの代わりに、遠くへ眼を向けます。最初の計画を引き出します。私たちの周りの現実世界にとっても同じことです。広い空は、眼には青でしかありません。しかし、それは私の頭の上に広がっています。見ることは、見たいと思うことです。生きることは、生きたいと思うことです。人生というものは、歓喜の歌です。ベートーヴェンは苦悩に打ち勝ったことが良く言われます。しかし、そこではベートーヴェンの全てが説明されていません。生き物がそれと同じ勝利を収めるなら、何でも構わないのです。乞食も同じです。恐らく、犬も同じです。

少なくとも、生き物は何時か死にます。死ぬ原因は多少なりともはっきりしていますが、その結果は何時も同じです。その人生には最早人生の味がありません。苦悩も喜びと同じになり、全てが不純物であるかの如くです。行動は干上がった泉の如くです。その時、世界が間違った行動で崩れるのは避けられません。生きるのを最早望まない人々にとって、それは直ぐに世界の終焉になります。その様にして人は死にます。死ぬこと、それは諦めて断念することです。

死は、それ故に或る意味では何時も意志的です。生きるのに疲れた時は死ぬしかありません。しかし別の意味では、死は何時も意志的ではありません。もしも何か外的原因が人生に毒を盛れば死ぬしかありません。その若者を殺したのは決して彼の手でもピストルでもなく、小さな原因が蓄積されたのであり、恐らく排泄されない何かの酸で、最早何もかもが幸福でなかったものを生んだのです。これらの酸が、心臓を鼓動させたり熱を下げたりする神経を麻痺させるのであり

、あるいは主要な脳に固着して想像力を混乱させたり手の動きを鈍くさせたりするようになるのです。それは何時も同じ事象となります。人は何時も病気で死ぬのです。

(一九〇九年五月二九日)

二十七 国営企業保護 (PROTECTIONNISME)

海外の人々は器用ですが、優良な気送速達郵便装置を作るまでになく、それは本国の人々が毎年何百万通も発送出来るものでした。海外の製造業者たちは、本国の人々によって発送される気送速達郵便に七五%の税を定めた大臣に不平を言います。海外の人々は、結局のところ保護された気送速達郵便の不具合を話題にすることになりました。

本国の人々の製造業者たちも、大臣に不平を言うようになりしました。というのも、この新しい税は気送速達郵便を駄目にしたからです。大臣は言います、「私を当てにしなさい。私たちはあなた方を守ります」。そして、海外で農業機械が年に何百万台も購入されたので、本国のセールスマンが輸入する時は八〇%の輸入税が課せられます。

海外の工場はこの見事な反撃に襲われ、自動車の製造に頼らざるを得ません。しかし、本国から送られたエンジンを仕上げ調整するのは直ぐに出来ませんでしたので、輸入車に九〇%の税金を定めた大臣に不満でした。

本国の人々は討議しました。そして、海外から毎年多くの工作機械を買ったので、優位であったことは異論の余地のなかったその製品に九五%の輸入税を課しました。本国の製造業者たちは宴会を催し、政府に祝辞を送りました。何故なら、もしも自動車の販売が少なかったなら、それに反して遙かに高額の工作機械を購入したからです。

しかしながら海外の人々は、今は葡萄酒を非難していました。本国の人々は林檎や干しスモモやオレンジのことで反論します。その時、他の人々はピアノについて砲門を開けましたが、ピアノ業者は塩豚を痛めて恨みを晴らしました。時代物の家具についての二〇〇%の税金には、本国は石油の税を上げて応酬しました。ラードが酷く高額で、照明で破産するのは分かっていたので、本国の市民たちはその時はしっかりと守られていたのが分かりました。

両方の税関の収益が著しく減少した事態にもなりました。大変に高い関税は、収入の減少を示しているのが分かります。それ故にあちらこちらに開いた穴を塞ぐために、新しい税金を設けなければなりません。二人の大蔵大臣は同じ日に同じ談話を正確に話し、国営産業を保護したことを断固と示しました。イリュミネーションが作られ、そして購入されました。

その間に、新しい産業は発展しました。巨大な施設が造られました。多くの人々が田舎を去って町に来ました。その飛躍は一度に与えられ、全てが必要以上のものを生みました。保護された産業は、それ以上のものを決して作りません。危機や休業やストライキがあり、小売商店はそれに苦しみました。

選挙になった時、この忘れがたい戦いを導いた人々は、過去に行ってきたように、未来も国営産業を保護するのを誓いました。彼らは全員が再選されました。

(一九〇九年六月二日)

二十八 私は雨が好き (J'AIME LA PLUIE...)

私は雨が好きです。大気は洗われてきれいになり、大地は芳香を与えます。私はどしゃ降りの大雨が好きです。雲はちぎれ、柔らかな光が刻一刻と変わり行き、そして地平線上に薔薇色の繊細な光の線が現れます。

ノルマンディー人である私のこの喜びを、或る教養ある人に話すと、彼は言いました、「あなたはパラドックスを言いたいのだね。雨は農業にとっては良いだろうが、私は好きではない。雨は気持ちを冴えなくして、悲しい気持ちにさせる。たった今、一台の大型トラックに出会ったが、泥濘に往生していたよ。そのエンジンの音を聞いていると、私の耳まで泥だらけになったようになる。その時の空は灰色である。私の心も灰色だ。私は平然としていられず、胃の中にも雨が降るように、私の心の中は冷えている。そんなことはご免被る。お分かりだね、空は青く、光に溢れていること、それが人生の源である。私が認めるのはギリシア時代である。『イリアス』は偉大なる光を放っている。あなたは光に別れを告げるイフィゲネイア(1)なのだ！」。

雨の中には、沢山の文学があります。泥は埃よりもはるかに清潔です。人は泥を見て、取り除くことができます。人は息をしても泥を吸い込みません。私はホメロスの作品である英雄叙事詩を読みました。彼の英雄は恐るべき野人ですが、ギリシア悲劇は余りに退屈です。その形式は美しいのですが、生彩が欠けています。それは当然であるということです。何故なら、太陽の光は色を褪せさせるからです。強烈な光を注意して見てご覧なさい。色彩は全てが褪めています。南フランスの人は雨が少なく乾いているためにさっぱりしていますが、粗野な血筋ですから私は北フランスの人に魅力を感じています。南フランスの山々は禿げ山で、石だらけの段丘、緑というよりも灰色のオリーブの木、優美さのない糸杉、それ等は黒く見えます。そこの光を全て鎮めて見るためには、井戸のような黒い瞳でなければなりません。

私たちにはもっと柔らかい光と、ごつごつしていない影が必要です。雨が上がって四角い青空が雲の間から姿を現すときは、柏やブナや榆やマロニエやアカシアが、私たちの目の前にあるパレットの上の手つかずの絵具よりも純粹です。より豊かな数え切れない緑の色調を広げて行く時です。さわやかな風が葉を揺らし、水蒸気が細長い小道に漂い、大地は足元で柔らかく弾力があり、屋根はきらきら光っています。一つひとつのものの違いをきちんと把握しているように、眼で見るものは全てが新鮮に見えます。それは豊饒さや力強さに近く、夢想のようなものからは遠いものです。それはあなたの思考が、主人に忠実な犬のように何回もぐるぐるとあなたの回りを走りながら、自分の裡を散歩する時です。それに対して焦土と化した風景の中での思考は、地平線を何時までも永久に走り続け、恐らくそこで産まれるものは情熱と饒舌です。何故なら、それ等の思考は細やかではなく、一番大切な思いもないからです。それらの思考は法学者のものであり、哲学者のものであります。それらが土竜のように黒いのは、全て雨が欠如しているからです。もしも古代ローマの広場に雨が降ったなら、カエサルの頭にはもっとさわやかな思考が芽生えて、カトリック教が広まることもなかったでしょう。

(一九〇九年六月三日)

(1) ミュケナイ王のアガメムノンの娘で、女神アルテミスの怒りを静めるために、父の命で人身御供になった。

二十九 無線電信 (TÉLÉGRAPHIE SANS FIL)

昔、今の地球から遠くに、水晶の惑星に住む両眼のない人々がいました。地面や山の自然を成していたのは水晶でしたけれども、驚く程に透明で、彼らには固くて光沢のある岩でしかありませんでしたが、両眼がありませんでした。

両眼のないこの人々は、科学や芸術とは全くの無縁でした。私たちの流儀が全く通じませんでした。何故なら私たちの科学は両眼の娘であるからです。両眼のない彼らの天文学は、多くを述べないのが本当らしいのです。彼らはせいぜい太陽の運行を見抜く位です。何故なら、それは肌で熱さを感じられていたからです。

両眼のない学者たちは、数世紀後に進歩して、電話線の無い電信術を発見しました。そして、こんな風でした。この国の人々は皆が火を知っていましたし、火を点けて、それを保温して暖めることを知っていました。しかし、火の熱は遠く離れていては感じないことも知っていました。従って或る学者が、火は或る意味では何十キロメートルも何百キロメートルも行動することが出来て岩壁も貫くことが出来ると言った時、両眼のない人々は最初簡単に信じませんでした。しかし大変に感度の良い装置を使ったならば、そしてそれは遠く隔てていても記録し化学的分析で大変容易に取得出来て、数キロメートル離れていても全ての火が分かるでしょう。そしてその時、火が消えたり再び点いたり、あるいはそれを何かの映像で明らかにしたり隠したりして、無線でニュースを伝えるようになりました（彼らはずっと以前から電気による通信を知っていました）。そのことを知らない人は皆感嘆して講堂へ駆けつけますが、それは両眼がなくても聴覚や触覚や嗅覚で自然とこれらの奇跡が確認されるからです。

取分け彼らをびっくりさせたのは、触れることが出来ず（彼らは音によるものの伝達と比較していました）、非常に速い電波が大変に固いものでしたけれども大地や岩盤（それは水晶でした）を通り抜けられることでした。学者たちの中で最も創意工夫に富んだ者たちは、この驚きをなくすために働きました。彼らは音が最も固い物体を通過して大変に強く伝達していたことを分からせましたが、熱は同じでも、もっとゆっくりで簡単ではないことを分からせました。しかし、彼らの論文を理解するのは退屈です。二世紀か三世紀後に科学が作れなかったものを作り、びっくりさせることもなくなって習慣になるしかなくなったのです。何故なら、人は毎日確認することを理解するのは容易だと信じているからです。

従って、両眼を持っている地球の息子である私たちは、つまり二十キロメートルも三十キロメートルも先の火を感じる事が出来る受信機を持っている私たちは、生まれた日から両眼を使っているのです。例え驚きが最小であっても光による無線電信は、両眼のない人々には奇跡も同然と思われたのを理解しています。

(一九〇九年六月六日)

私は最近、ニーチェについての記事をもう一度読みました。それはこの世界では珍しいものではありません。この哲学者は難解で逆説的であり、常識を軽視しますので発狂して死にますが、皆又は殆どの人が彼を偉大な芸術家で崇高な精神の人として絶賛して受け入れています。昔からそうでした。昔から人々は激昂している狂人とか夢想する狂人、軍隊の長とか予言者を崇めてきました。幸いなことに、今はもうそうではありませんし、私たち一人ひとりには優しい心が、とりとめのない話には寛容な精神が残されています。アポロンから神託を受けたピュティアのように、天才は髪を振り乱しているのを私たちは望みます。偉大な人間が、神経衰弱になったり、窓から家具を投げつけるのは私たちには気に入りません。私たちは最早、シビルの巣窟へは行かないでしょう。しかし、神秘主義者とか熱狂的なジャンセニウス派信徒の知恵を学びに行くのを願っている精神的に非常に安定した純真な人なら、一人ならず知っています。私はそこから、ニーチェの興奮とか聖テレーズの法悦について黙考する青年たちを育てる、家庭の善き父親たちを引き合いに出すことが出来ました。彼らは音楽や音楽家たちを押し与え、あなたはこの取り憑かれた踊りの中で、それを疑うことがありません。崇高な音楽家であるオーストリアのユゴー・ウォルフは、彼らが言うところでは何度も閉じ籠もっていました。それは全く自然なことのようには彼らには見えます。インスピレーションは神聖な興奮です。〈哀れな理性〉となって、彼らはあなたを商業や産業の中に追い払います。

その様な思想には抵抗しなければなりません。私にとって混乱は醜く、情熱も醜いのです。興奮も醜いです。それが狂って死んだのを知れば、私は決して作家と共に好意を抱くことはないでしょう。大変に一貫した黙考は、しっかりした思考を導くことが出来るのを私は知っていますが、孤独でいることが辛いことも知っています。しかしながら、知性の訓練が健康を害するなどとは簡単に信じていません。科学に精通していたオーギュスト・コントは、その入口を幾つか持っていました。パスカルも同じですが、そうとはいえ恐らく狂気が宗教という洋服を着ている時は、次々と全て礼儀に適った様子を取るのでしょう。そのことが示しているのは、大変に知性のある人間は割れ目も持っているかもしれないということです。彼らの両眼に燃える知性の閃光が、全てではないということを示しているのです。多分、狂気の原因は他にあります。敢えて言うとするなら、何ものかの中に下肥が浸透して行くうちに、何かの怒りが含まれたり、何か自尊心であったり、恐怖であったり、空想であったりします。これらの不幸な人々は他の何よりもより筋道を立てて整然と絶望的な考えを持ちます。全てを力に頼るような考えを持っていること、まさに動物によって訓練されている自分を感じながら、人間性や良識にすがっていたためであるのを私は十分に信じてもいたいのです。要するに、彼らがもしもそんなにも良い思想を持っていなかったなら、誰でも馬鹿になることがあり得るように、極めて早く狂人になることもあったと私は想像します。

思想とは精神的安定であり、平静さです。真実は理性的です。美も理性的です。情熱、怒り、興奮は人間を栄光へ押し進めることが出来ます。でもそれらをニーチェに与えることは決して出

来ません。もしも或る人間が自分自身の裡に、偉大さという偏狭を育てていたとするなら、もしもそれが姿を現していたとするなら、もしもそれを押し進めていたとするなら、もしも書いたものを出版社へ持って行ったとしたなら、もしも社交界から社交界へ音楽とか詩をまき散らしていたとするなら、この狂気の一粒は少なくともプラトンとかゲーテの賢明な弟子に、少なくとも二十年早く通じていたと私は敢えて言います。しかし、もしもそのことと一緒に良識という化粧をしていなかったなら、もしもその狂気がそれ相応に服を着て調子に合わせて踊るのでなかったならば、無視され嘲笑されるでしょう。プラトンやゲーテやヴィクトル・ユゴーの最も高い躍動に続きなさい。プラトンを模倣する時は、少なくともニーチェに続きなさい。何時もあなたは、より純粋な空気を呼吸するでしょう。感嘆が喜びとしてあなたの心の中に降りて来て、最後には微笑しなけばならなくなるでしょう。音楽も和らげてくれます。涙を流すことさえあります。才能とは、一言で言って仕舞うなら、何時も喜びであり、健康、平静、生命です。美と真実は、あらゆるものの中における良識という閃光です。

(一九〇九年六月八日)

(次号へ続く)

一ノルマンディー人のプロポ III
【2014年2月号】

<http://p.booklog.jp/book/82068>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82068>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82068>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ